

「ニュースピーク」が強要される社会では、人々の思考は画一化し、生活は単調なものになると想像する。そこでは「文化」という概念が消えるだろう。さらには人間が限りなく動物に近づく状況が生まれるだろうと予想する。

言葉は人間が人間であるための証だ。私たちは言葉によって思考し、相手に意思を伝える。なぜそれができるのか。私は、言葉が活着ているからだと考える。言葉は歴史や文化や人々の生活の中の必要性から生まれ、それらを内部に含んでいる。そして、時には人間のアイデンティティまで巻き込みながら変遷している存在だ。

例えば、「とても」という言葉は、地方では「ぼっこう」「ばり」「めっさ」など様々な形で使われる。そこには地方ごとの文化や歴史が刻まれている。そして、違う言葉を使う者同士が会う時、人は自分が何者かを知る。もしかしたら、この衝突からお互いを理解するための新たな言葉が生まれるかもしれない。また、現代の若者は「まじで」「どんだけ」「やばい」など次から次に新しい「とても」を作り出し、その言葉を通してお互いにつながっている。

このように見ると、言葉は人間社会を映し出す生の鏡だ。その鏡に映る自分を見て、人類は自分を知り、自分や社会をよりよい方向に変えようとしてきたのではないか。言葉が画一化され、意味が統一されるなら、その鏡に「人間」は映らないだろう。

今の日本社会はどうだろう。些細な行為に「賞賛」「絶賛」「神対応」というような賛辞が贈られる。それはまるで「自分の存在に気づいてほしい」と訴える子どもをあやしているかのようだ。また、書籍やネットには人を罵る言葉が蔓延している。言葉という鏡に映る日本は、私にはどこか歪んだ暗い表情をしているように見える。明るく元気な表情を取り戻すことを願っている。